



わたしの聖戦

女性が働くことについて

155

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

フロイトと夢

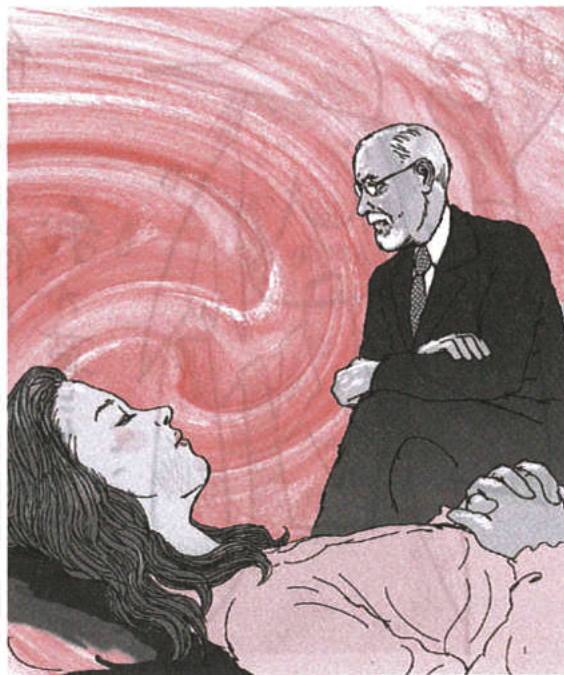
ウィーンには、心理学者、S・フロイトの記念館がある。オペラ座やシエーンブルン宮殿などのメジャーな観光地ではないが、根強いファンがいるらしく、さほど大きくはない記念館ながらそこそこの賑わいである。

この記念館は、実際のフロイトの診察室をほとんどそのまま保存し開放しているほか、発達段階で表れる「男根期」を提唱したことに由来するか、男性のシンボルを強調したオブジェが天井からぶら下がっていたりして、なかなか密度の濃い作り込みになっている。フロイトは、深層心理学の大家だ。つまり、無

意識下にある抑圧された記憶が様々な心的症状を引き起こすのであり、無意識を意識化することで症状が消えると考えた。そのため精神分析の手法を考案し、多くの患者の治療に専念したことで知られる。映画の中で、しばしば患者がソファに横になって、精神科医のカウンセリングを受けている場面が登場するが、あのようなスタイルを実践したのがフロイトであり、記念館には彼が診察に使ったソファもちゃんと残っている。

フロイトは、深層心理を探るために「夢」に着目し、「夢は無意識に至る王道である」と説いた。

夢は、睡眠中に誰もが見るものであり、自分の無意識を具現化しているといわれればいかにもそのように思えてくる。夢は目覚めた後にはほとんど忘れてしまうが、意識的に見るものではないので、夢の内容には自分でもうかがい知れない「何か」



が隠されているのだと思いたくもなる。だからこそ、起きてからもしばらくは、夢にどんな意味があったのだろうかとあれこれ考えをめぐらすことになる。

よく知られているように、睡眠は「レム睡眠」と「ノンレム睡眠」に大

別される。レム睡眠は、急速眼球運動のことで、眠っているのに眼球だけが動いているのが傍で見てもよくわかる。それに對し、ノンレム睡眠はレムより深い睡眠を意味し、レムとノンレムは一晩中に交互に現れる。夢を見るのはレム睡眠中

であることがほとんどで、ゆえに目覚めてすぐなら夢の内容を思い出すことができないのだといわれている。夢の記述は、旧約聖書の創世記にすでに

ある。それらに描かれている夢は、すべて「予言」、すなわち未来を予期する内容である。夢を見たとき、それが過去ではなく未来について語っていると考えるしまうのは昔も今も同じであるようだ。いずれにしても、睡眠や夢のことはわからない

ことばかりである。夢が深層心理の現れだと説いたフロイトには敬意を表するが、自分の夢はあまりにも脈絡がなく、何かを予言しているとはとても思えない。

ところで、フロイト自身もユダヤ人だが、フロイト記念館一帯は第二次世界大戦のとき、大勢のユダヤ人が連行され閉じ込められた場所としても知られる。理不尽に捕らえられ、意味もなく死んでいった彼らはどんな夢を見ていたのだろうか。叶わぬ夢を抱きながら殺された彼らに比べ、今に生きる我々は何と幸せなことか。

睡眠中の夢よりも、明確な意識のもと心に描く夢のほうが現代人にとっては大切であり、自由で豊かな人生を貫いていく上で不可欠であることだけは、どうやら間違いないのではないだろうか。

イラスト・伊藤栄章